

日韓滑稽文学における対比研究試論

『東海道中膝栗毛』と『興甫傳』を中心に

康 志 賢

一 はじめに—目的と意義

比較文学の一方法として、同主題の各国文学での発現の仕方を比較・解説・評価するという方法がある。これを「一般文学」(General Literature)と称し、第二次大戦後アメリカの比較文学者を中心に起こったが、今やこのような考え方はアメリカに限らず西欧諸国・日本・韓国にまで「比較文化」と咬み合って広がりつつある実状である。それで本稿のような「日本と韓国の滑稽文学の対比研究」というテーマも生まれたわけだが、『東海道中膝栗毛』と『興甫傳』^①を以下の理由により素材として選定した。①両国の滑稽文学を最も代表する。②同時期に全国的人気を呼び始め、現在に至るまで大衆的人気を得ている。③庶民文学である。

しかし、一方ではこのような研究目的と意義を有しながらも、両作品の比較に当たって予想される次のような問題点を克服できなければ論議は始まらないだろう。

最初に、両作品の成立と構成の相違によって生じる問題点、即ち、両作品が拠っているジャンルが紀行文とパンソリという差、一作家の創作品と異本が多い多層文学という差、説話的プロットの差等を克服しなければならない。それから、両作品の文学史的位置が近代性と前近代性の共有という面で同一であることを論じるべきである。即ち、俗語を使った写實的描写と、同人物から肯定と否定の人間観を同時に描いているということは、文学の近代性に繋がる画期的時点として、しかしながら時間・場所・行動の三一一致の法則が時々守られて

いないゆえ、文学の前近代性^②から抜けきれなかったという面で、両作品は文学史的立場が同一であることを論じなければならない。

しかし、本稿では紙幅の関係でこれについては簡単に触れるに止めて、詳細は別稿（『『膝栗毛』と『興甫傳』の比較文学的研究の可能性を探って』『日本語文学』16輯、韓国日本語文学会、2003年3月刊行予定）に譲る。従って、本発表の主眼点は両作品の修辞法的技巧の分析を行うことにより日韓滑稽文学の特質に近づくことに置きたい。

二・一 成立と構成上の問題点

『膝栗毛』と『興甫傳』が依っている形式は、前者が紀行文系小説、後者がパンソリ^③系小説と言えるだろう。当時の江戸民衆社会における旅行のブーム、朝鮮民衆社会におけるパンソリのブームの下に、時代を反映して民衆の支持を浴びながら生まれたジャンルである。それで民衆が主人公として描かれ、読者になり得たのである。成立した社会的背景により、紀行文とパンソリという基とした文学形式は異なっている、①舞台が地方である、②庶民の生活を描いている、③『膝栗毛』は紀行の形式を借りたとはいえ、一つの場所で行われた人間喜劇と見て差し支えない面がある、ということにより共通性が生まれ、比較の意義も成立する。

大衆の意識が集約された『興甫傳』と、個人（十返舎一九）の意識の創作品である『膝栗毛』を対比するのは無理であろうか。しかし、両作品は他人の考え出した筋や趣向であっても、更にそれをより効果的に使った時、読者は喜ぶという風土の下で成立した。文学を作者一人だけの営みと考えず、作り手と受け手が一体となって作り上げる世界だ、という近世の文芸観が『膝栗毛』をして読者との相互作用で流動させ、同じく『興甫傳』の膨大な数の異本を創出したのである。

弥次・北八の江戸を出発して、東海道を過ぎ大阪に至るまでを骨組みとする『膝栗毛』と、燕を助けた興甫は瓢箪から出た宝により金持ちとなり、その真

似をした欲張りの兄のノル甫は滅びるといふ説話的構成の『興甫傳』は、全く異なるプロットである。しかしながら、主人公の二人の道化が同比重を維持しながら、弥次・北八の場面・事件ごとの小さい失敗が集まって『膝栗毛』を成し、ノル甫の最後の大きい失敗が『興甫傳』の主題を表す方法として選ばれている。そしてその主人公同士、もしくは第三者との対立という構図を両作品は主な滑稽の背景としているのである。

二・二 文学史的位置

『興甫傳』は律文でありながら、具体的で現実的、且つ緻密な描写をしていることから文学的近代化の発芽の一面が窺える。例えば、興甫の家の様子を「冷え込んだ部屋、古いむしろ、のみ・しらみ背中の血を吸い、前の戸には棧だけ残り、壁には下地だけが残っていて、霜月師走の寒風が矢を射るように吹き込み、赤子は乳をくれ、上の子は飯をくれという」のように描写する。

『膝栗毛』が日本の近世俗語文学だということ^④、『興甫傳』は韓国の近世俗語文学である。『膝栗毛』の方言をそのまま取り入れようとする写実の基本的態度は^⑤、『興甫傳』のパンソリという口碑叙事公演ものの模倣性と同じ態度であるのだ。口語体で直接話法を駆使した『興甫傳』には、『膝栗毛』同様、悪口・悪態までもずけずけと吐く場面がやたらと出て来る。

『膝栗毛』に登場する様々な人物たちは善人だとも悪人だとも言い得る性質を同時に有するように描かれる。同じく、『興甫傳』の兄弟愛が深く慈しみ深い興甫は処世的未熟者、生活的無能力者になって、滑稽と嘲笑の対象へ転落する可能性を有し、一方、強欲且つ徹底したけちん坊ノル甫には十八世紀から徐々に経済的支配権を増大させてきて、長い間の農奴的因習から抜け出そうとする近代的人間像^⑥の契機を見出すことができるのである。

『膝栗毛』・『興甫傳』の前近代性として、作者の叙述の観点の混乱とそこから起こる前後矛盾するエピソードが挙げられる。読者の思考に迎合しすぎると、構成は粗野になり、執筆態度は行き当たりばったりになりがちである。近

代文学、いわゆるプロットの一致を重視する文学様式では、「部分が全体の構造の為に」奉仕するのが当然のことと思われるのに、『膝栗毛』・『興甫傳』は「事件の流れが部分の為に」奉仕している面があるということである。

三・一 作品の内容面から見た滑稽（作中人物の本来的滑稽性）^⑦

本来的滑稽性とは受動的・自動的な笑いであって、滑稽を目的として意図的に働くのではなく、無意識的に滑稽となる場合である。本人たちに人を笑わせようとする気はないのに周りから見ると可笑しいという滑稽である。

内容面から見た滑稽というと、まず性格的滑稽が挙げられる。これは滑稽な行為をしやすい人の性格に対して感じる滑稽である。『膝栗毛』と『興甫傳』では性格的滑稽の手法として、子供っぽく（稚気）、雰囲気に乗せられやすく（お調子者）、見栄っ張り（虚飾気取り）で欲張り（強欲）の性格という手法を共通的に使って笑いを狙っている。『膝栗毛』にもっと強い性格というと、登場人物たちが食い意地を張り（意地汚さ）、嫉妬深く、意地っ張り（負け惜しみ）である反面、臆病者ということで笑いを引き起こす点にあり、『興甫傳』独特の人物の性格というとのんびり屋ということで笑いを誘う点にあった。

①稚気；（『膝』五・上）北八「しめた〜。約束のとおり、是からおれが旦那さまだ。コリヤ〜弥次郎兵衛、おれはもふ、馬にも駕にも乗あきた。……はきつけぬわらじで、コレ見や、豆ちうが足だらけだ」（『興』）「村の人が通りがかりに“このお尻引っ込めよ”という声聞いてびっくりして起きた興甫は大声を上げて男泣き」

②お調子者；『膝栗毛』前掲の稚気の例文は、弥次の言葉をそのまま真似て気取ろうとした北八が、つい調子に乗り、慣れない言葉を言おうとして足と豆とを逆に言ってしまう場面のゆえ、ここの例文にもなり得る。

『興甫傳』には、何回もの失敗にも拘わらず、今回の瓢箪には黄金の瓶かめが入っているかも知れないよ、という騙し屋同然の

チヨラン
楚蘭の言葉を聞いたノル甫が丘まで突っ走り瓢箪をもぎ取って
来る場面がある。

- ③虚飾気取り；（『膝』五・上）弥次「江戸じゃアうめへものの、くひあき
してゐる骸^{からだ}だから、道中のものはねからくへぬ。馬にのれば
あぶなし、駕はあたまがつかへる。店のものどもが、おやど
の駕をおつらせなさるが、よふござりますといひおったが、
なるほどそふすればよかった。不肖してのればのものの、
もふへ道中駕にはあきはてた。」

『興甫傳』では、二言目には故事成語を取り出し、漢文口調
になる興甫の態度等。

- ④強欲；『膝栗毛』発端で、弥次・北八はお金のために妻と離縁したり、自
分の女を人に押し付けたりする騒ぎを起こす。

『興甫傳』では、親から譲り受けた家産を独り占めにしたノル甫は、
食べ物を買いに訪ねてきた興甫に対して「お前は誰だい。”私は
興甫です。”“興甫って誰の子だい。”“ああ、兄上……”というふ
うに、物が無くなるのを惜しがって弟さえ知らんぷりする。

- ⑤意地汚さ；（『膝』三・上）弥次「アノ親父のこぬうち、後にのむぶんも
やらかそふ」北八「おらア此茶碗についでくんな……」

- ⑥嫉妬；（『膝』八・下）弥次が後家の男妾になることを嫉妬した北八がす
ねている場面である。北八「おらアしらねへ。勝手についでのみな
せへ……しづかにわらひなせへ。さかなの中へ、おめへのつばきが
はいらア」

- ⑦負け惜しみ；（『膝』五・上）弥次「今あげやせう。しかしあんまり見ご
とだから、（饅頭を）もふ二十くひなせへ。今度はおはつを
三百文あげやせう。そのかはり、くはねへとこっちへ貳百と
りっこだが、どふだへ」

- ⑧臆病者；（『膝』八・下）「大かみなりに弥次郎わっといふて、そこへへた

ばり……」

- ⑨のんびり屋；『興甫傳』で、あまりの貧しさに一層死んでしまいたいと泣き叫ぶ妻に対して、興甫は切迫した状況であるにも拘わらず次のように言う。「泣かないでくれ。顔淵のような聖人も安貧道樂したし、傳岩に垣を巡らしていた傳説も武丁に遭って宰相になったし、……ということだから、何とすばらしいことではないか。わしらも心だけ正しく持って時を待とうではないか。」

内容面から見た滑稽には、行為・事件的滑稽もある。これは錯誤または不注意などにより起こる動作ないし事件の滑稽である。『膝栗毛』・『興甫傳』には共通して非現実的事件（ナンセンス）・予期に反する事件（反予期・見間違い）・無知から発生する事件（無知・くそまじめ）が滑稽の技法として使われ、また、『膝栗毛』の茶番・『興甫傳』の笑劇が対を成して同じく使われている。そして、身体の欠陥を笑いの種としているのが『膝栗毛』の特色であり、至る所に諷刺を滑稽の中に隠しているのが『興甫傳』の特色であった。

- ①ナンセンス；（『膝』五・上）田舎者が頭を北八の足で撫で回されて怒り出すと弁解する場面である。北八「さっき焼酎を（足に）ふきかけたら、それに此あしめが酔くさって、ソレ御らふじろ、ひよろり〜。アレまだおめへのあたまに、からかをふとするコリヤ〜〜」

『興甫傳』では、燕でお金持ちになった弟の噂を聞いたノル甫は、霜月師走から霞網・鳥もちを担いで燕を駆り立てに行き、何かが飛んで来ると燕が来た来たと騒いだが結局鳥だったのがっかりする。

- ②反予期・見間違い；『膝栗毛』三編・上で、腹痛の葉だと思って北八が弥次に飲ませたのは、錦袋円に入っているブリキ製の観

音像だったという一件。

〔興〕「興甫は家もなかったので家を建てようとしたが、材木を探すのに、万畳の青山に分け入って、大きい丸太・小さい丸太をガタンガタアンと伐り倒し、奥の間、板の間、庇、母屋、内外の格子障子、母屋に継ぎ出した間に連子窓、遣り戸、口の字型に建てる、というのではなく、家の材木を探すのに黍畑の隙間から入り込んで黍の茎を切り取り集め、奥の間、板の間、庇、母屋と、くまないつもりで一夜漬けの樹形の家をギッシリ建てて顧みると、黍の茎半分がそのまま残っているではないか。」

- ③無知・くそまじめ；『膝栗毛』初編で、名物菓の外郎を知らない北八が餅だと騙されて食べる一件。

『興甫傳』では、金持ちになった弟にノル甫が訊ねる。「おまえこの頃、夜露にぬれて出歩くそうだな。」興甫あきれて曰く“夜露とは何のことですか。”ノル甫の野郎答えるには“おまえ盗みを働いているそうだな。”

- ④茶番・笑劇；『膝栗毛』初編で弥次・北八が親子のように装って宿に泊まり込む場面。

『興甫傳』で、興甫からもらった花草筆筒^{ハチョザン}を背負ったノル甫は「花草ザンザンザン^{ハチョ}と言いながら行く途中、溝を飛び越えるはずみにうっかり忘れてしまい、思い出そうとして‘醬油^{カンザン}かな酢醬油^{チョザン}かな’ とつぶやきながら帰って来る。」

- ⑤身体の欠陥；〔『膝』発端〕親「仏がちがひ申た。此仏にやア首がござらない。そしてわしの娘は女でござるに、コリヤア男の死人と見へ申て、胸髭がはへてござらア。いも七「ナニ首がないと

は、ドレドレほんにコリヤア首がねへ。弥次さんおめへどふ
した。弥次「ナニ、おいらが知るものか。そこらにやアおち
てはねへかへ。」

- ⑥諷刺；（『興』）子供たちが三食にも有り付けられない状況が切実に描かれ
てから、そんな中でも「興甫の慈しみ深い心は深山の流水、……富
貴を望むことがあるだろうか。」と羅列してからすぐ「興甫の妻曰
く、あなたがない清廉を装うことは止めて。顔子瓢箪、飢えての
廉恥三十で若死にし、伯夷叔斎の飢えての廉恥を青楼少年笑ったと
いいます。……お兄様のお宅に伺って、お米でもお粥でもいいから、
もってきてくださいな。」と言せわ、興甫をノル甫の家に行かせ
る場面などが挙げられる。

三・二 作品の表現面から見た滑稽（作中人物の意図的滑稽性）

意図的滑稽性とは、作中人物が意識的に生み出す滑稽という意味として捉え
た。攻撃的な笑い・能動的笑いである。登場人物たちの会話の中で、言葉の意
味をわざとずらしたり、曲げたりして作った新しい言い回しに出会った時、笑
いは生ずる。

表現面から見た滑稽というと、まず言説的滑稽が挙げられるが、『膝栗
毛』・『興甫傳』には比喩・スカトロジ・詭弁・とぼけの技法が同じ割合^⑧で
現れている。そして、言説的滑稽の中で性・皮肉は主に『膝栗毛』の特色であ
り、誇張・術学^⑨・多弁・落ち^⑩は主として『興甫傳』に優勢な技法であった。

- ①比喩；（『膝』三・上）弥次「ハ、、、白いふんどしで、かごの胴中^{どうなか}
くくった所は、しっかいおやしきの葬礼といふものだ」

（『興』）「御膳が四つ脚で天井に向かってお祈りし、釜は首を吊り、
箸は顎を釘に引っ掛けていて……」

- ②スカトロジ；（『膝』七・上）ていしゅ「ナニ雪隠を誰が沸かしたぞい。小
ぞう「それじゃて、いんまのさきわたしがさんじたさかい、

すぐいて見なされ。ぼっぼと煙が出てじゃあろ。」

（『興』）「俄に瓢箪の中からつむじ風が巻き起こりながら、糞の糸筋がほとばしる音、山川が振動することよ。家中の者がみな吃驚仰天して外へ出て門の隙間から覗くと、固い糞、下痢の糞、柔らかい糞、乾いた糞、あらゆる糞が一度に出てきて家の上まで埋もれる。」

- ③詭弁；（『膝』初編）ちゃやのおんなかどに立て「おやすみなさいやアせ。

あったかな冷飯もございやアす。煮たての肴のさめたのもございやアす。そばのふといのをあがりやアせ。」

『興甫傳』で、興甫の妾楊貴妃を見たノル甫の台詞「お前のものが俺のもの、俺のものがお前のもの。俺の女がお前の女、お前の女が俺の女だろう。」

- ④とぼけ；（『膝』三・上）女「御膳を上げませう。北八「イヤ三ぜんくやアたくさんだ。」

『興甫傳』では、前掲強欲の例文のように物が無くなるのを惜しがつてとぼけた受け答えをするノル甫がある。

- ⑤性；（『膝』三・上）いち子のばば「むすめがいやならわたしでは。北八「もふこふなっちゃア、だれかれの見さかいはない。とむちうになつてしゃれる。」

- ⑥皮肉；（『膝』五・上）北八「ほんになア、けふはじめてわらじをおはきなさったから、古いあかぎれが再発した。」

- ⑦誇張；（『興』）前掲反予期・見当違いの興甫の家の建て方の描写や、スカトロジ文例のノル甫の家が糞で埋もれる状況描写にも誇張の技巧が使われている。

- ⑧術学；（『興』）前掲のんびり屋の文例のように、『興甫傳』では多くの中国の故事成語や漢詩漢文句の術学的表現が目立つ。

- ⑨多弁；（『興』）前掲反予期・見当違いの文例。

⑩落ち；（『興』）興甫の子供たちが母親に食べ物をねだる場面である。「一人が出てきながら、ねえお母さん悦口子湯に蕎麦を入れて食べたい。また一人が座り込みながら、ねえお母さん寄せ鍋が食べたい。また一人が走ってきては、ねえお母さん棗入りの餅が食べたい。やれやれこいつら、かぼちゃ汁さえ食べられないのにせがむんじゃないぞ。また一人が出てきながら、ねえお母さん今年の春から股の間がむずむずして、嫁を取らせておくれよ。」

表現面から見た滑稽には、音韻的滑稽もある。これは発音言語を弄ぶ言葉の洒落・言葉遊びである。具体的にいうと、『膝栗毛』・『興甫傳』に同じ割合で使われている、縁語・特徴ある言葉の響きの中で古典の文句・故事を利用した滑稽がこれに当たる。また、『膝栗毛』が占める割合が高い、特徴ある言葉の響きの中で諺と語呂合わせ・尻取りや、『興甫傳』の方が優勢ななぞなどを利用した滑稽の修辞法も音韻的滑稽に当たる。

①縁語；（『膝』三・上）「頭のにってきた八に今たたかれし葉罐あたまの親父へこんだ」

『興甫傳』では、「鏡というと、手鏡と総身鏡ですか、千里鏡、万里鏡ですか。何の鏡でしょう。」「万里鏡でござる。よいやよいやさと、視眼鏡を見回しましょう。……」

②古典の文句；（『膝』初編）北「ナニおいらがかわりに。いづれを見ても山家そだち、身がはりにするつらがあるものか」

『興甫傳』では興甫と興甫の妻の身なりの描写に巫歌を使用する。「^{ビヨンザ}縁の取れたほろ^{マンゴン}網巾に瓢箪かけらの^{ぼたん}貫子を付け……襟のみ残った^{ずぼん}チョゴリ、つぎはぎだらけの下着、……」

③故事；（『膝』発端）「この道に孝行ものとして、黄金の釜を掘いだせし心地して喜び」

『興甫傳』では、前掲諷刺の文例の興甫の妻の言葉。

- ④ 諺；（『膝』発端）北八「……それが出来ねへと、忽ち百日の説法屁ひとつ。」
- ⑤ 語呂合わせ（地口・掛詞）；（『膝』三・上）前掲とほけ文例中の御膳・三ぜん。
- ⑥ 尻取り；（『膝』初編）「首ばかりとんだはなしの残りけりほんのことかはしらはたの宮」
- ⑦ なぞなぞ；（『興』）名字に関するなぞなぞなどがある。「木二つが相撲を取っている名字です。」「木の字二つを側に付けるとはやし林の字、林さんだね。」……「やまの山の字四つを四方に巡らしている姓です。」「やまの山の字四つが囲まれているから、田畑の田の字、田さんだね。」

以上両作品に使われた滑稽のレトリック的技巧を対比してみると、〈図表1〉になる。

同じ滑稽文学であっても、このような修辞法上の相違が生じる原因は、当然のことながら作品の成立基盤、つまり、社会的背景等が異なる故であろう。諷刺がない滑稽文学は韓国に存しない、とまで断言する研究者がいる程なので、両作品の相違点が生じた背景を代表して「諷刺」^⑩を以て考えることができる。

韓国の文化史において外国から侵略を受けなかった時代はなかったが、特に文禄・慶長の役、丙子胡乱を経験した庶民たちは不安と挫折、そして腐敗した支配階級に対する反抗意識を覚えたに違いない。それで心の慰み物であるパンソリの中にも自ずから諷刺の精神が反映されたと考えられる。従って、表面では専ら純真な笑いを狙っていて、韓国の滑稽を代表する『興甫傳』にさえ、その裏面を探りながら読めばつい諷刺が見付けられてしまうのである。

そして、この『興甫傳』のレトリック的特殊性は、主にパンソリ系小説というジャンルの性質に因るものである。即ち、卑しい身分の広大によって演出されていた創成初期の無雑なものに、両班が文章的表现において助言を与えると

〈図表1〉(凡例;○・×印は有無よりは、相対的な優勢・劣勢を表す)

		『膝栗毛』	『興甫傳』		
内容面から見た滑稽	性格	稚気	○	○	
		お調子者	○	○	
		虚飾気取り	○	○	
		強欲	○	○	
		意地汚さ	○	×	
		嫉妬	○	×	
		負け惜しみ	○	×	
		臆病	○	×	
	行為・事件	のんびり屋	×	○	
		ナンセンス	○	○	
		反予期・見当違い	○	○	
		無知・くそまじめ	○	○	
		笑劇・茶番	○	○	
		身体の欠陥	○	×	
風刺	×	○			
表現面から見た滑稽	言説	比喻	○	○	
		スカトロジ	○	○	
		詭弁	○	○	
		とほけ	○	○	
		性	○	×	
		皮肉	○	×	
		誇張	×	○	
		銜学	×	○	
	音韻	多弁・羅列	×	○	
		落ち	×	○	
		縁語	○	○	
		特徴ある言葉の響き	古典の文句	○	○
			故事	○	○
			諺	○	×
語呂合わせ	○	×			
尻取り	○	×			
なぞなぞ	×	○			

いう段階を踏んで出来上がった文学だからこそ、「銜学」が重要な『興甫傳』の特色になったのである。なお、パンソリという臨場感から情緒の拡大を目指して「誇張・多弁・羅列」が、また突飛な「落ち」の手法が自ずから多く生ま

れてきたと考えていいだろう。

四 むすびに

日本で弥次・北八というと誰もが一般的に思い浮かべるはずのイメージを、韓国では興甫・ノル甫という名前が有している。古典の或る人物の名前がペーアを組んで、子供から年寄りに至るまで分かち合える一定のイメージの代名詞的役割をしている例は、両国において珍しいことではないだろうか。過去に拍手喝采を受けた古典が現代の我々にはもう理解しかねるものとして、その機能を喪失する機会が多いのに反して、『膝栗毛』と『興甫傳』は今も延々と語り継がれ、脚色される形を取ったりして生きているということは、やはり偉大なる庶民文学だったということを証明している。

猶、このように影響が及ばない共通性が両国の滑稽文学に同時に現れた理由としては、人類文明の笑いに対する美学的同質性は勿論のこと、社会的状況の類似に基づいた時代意識の共通の流れ・傾向をも考えるべきであろう。両国の滑稽文学において一般大衆が作者なり、読者なり、作品中の登場人物なり、大挙して参加してくるという事実も社会的状況に因るからである。十九世紀は西洋の文学が押し寄せる直前の時期で、日韓の伝統社会の文学が最も爛熟し、最後の花を咲かせた時期だと言える。両国はこうして古典文学の共通した遺産を、当代の広範囲の社会意識と関連して再生産しながら、近代民族文学を自らの底力で成し遂げようとしたのである。

以上、本稿では直接的な影響関係から離れた二つの作品を対比して、その類似点と相違点を考察することにより、日韓滑稽文学の普遍性と特殊性を究明する為の一步を踏み出してみようとしたところである。更に、このような対比研究が日韓小説史と文学史のみならず、世界文学史と文学一般論にも有益な作業になったことを希う。

〔附記〕

本稿作製にあたって2000年度韓国学術振興財団の支援を受けました。(KRF-2000-003-A00101)

〔注〕

- ①①テキストは日本古典文学全集『東海道中膝栗毛』（中村幸彦校注、小学館、1975年）と、九州大学所蔵『興甫傳』（筆者訳）に限定して用いる。以下、略して『膝栗毛』というのはテキストをさす。引用の出所は『膝』『興』と頭一文字を取って略記する。
- ②『興甫傳』の先行研究テーマは五つでまとめられる。パンソリ歌詞・異本・社会意識と主題・登場人物の性格と身分・諧謔的特色に関する研究がそれである。
- ②本稿で「近代」という用語は、価値基準に於いてではなく、両作品の特質を導き出すための一つのキーワードとして用いている。従って、「前近代」には否定的なイメージは込められていないことを前もって明らかにして置きたい。この前近代性も両作品を以て国民的ベストセラー化するのに一役買ったであろうからである。
- ③パンソリとは、始めと過程と終末がある統一された筋を有する物語を演唱する芸能。唱者（廣大）・鼓手・聴衆で構成される。
- ④洒落本・滑稽本・人情本等の近世俗語文学が近代写実理念に繋がるという指摘は、既に林原純生氏等によりなされている（『近世俗語文学と近代写実理念』『日本文学』30巻1号、日本文学協会、1981年）。
- ⑤その方言は必ずしも精密ではないにしても、一応写実的なものとなっており、このことが更なる旅情を醸し出して、非常の喝采を博することに繋がったと思われる（重友毅『日本近世文学史』岩波書店、1950年等参照）。
- ⑥林栄澤「興甫傳の現実性に関する研究」『文化批評』4、亜韓学会、1969年
- ⑦以下の修辞法の用語は、麻生磯次『笑いの研究』（東京堂、1947年）を参照したところがある。滑稽の技巧を分類するにおいて、レトリック的技巧の複合性によってその区別を付けるのは、極めて曖昧で恣意的なものにならざるを得なかった。単独で使われる場合もあるが、技巧の多くは複合して使われるものだから、本分析では最も目立つ特色を基準にして纏めようとしたが、纏めがたい場合はあまり拘らず重複させた。猶、『膝栗毛』における滑稽技法の文例は、主に発端・初編・三編上・五編上・七編上・八編下から取り上げた。
- ⑧『膝栗毛』における滑稽の技法を数える為に、先ず本稿では発端・初編・三編上・五編上・七編上・八編下をサンプルの範囲とした。ここで「割合」とは、これらと『興甫傳』の各々の作品中で占める技法の割合という意味で使っている。
- ⑨『日本国語大辞典』によれば、術学とは学問や知識があることを自慢したり、見せびらかしたりすることをいう。
- ⑩『膝栗毛』において狂歌は、作品中の事件にまとまりを付けて話の区切りを示すという役割をも担っている。しかし、突飛な終わり方をすることで笑わせるのが「落ち」であるというとき、『膝栗毛』では狂歌が落ちとして働いたので可笑しいというよりは、狂歌の中に織り込まれた様々な言葉の洒落の為に可笑しいといえそうだ。従って、『膝栗毛』における狂歌を落ちの技法としては見ない。
- ⑪『文芸用語の基礎知識』（至文堂、1988年）によれば、諷刺は作品としては時代・社会の欠陥・不合理的を摘発するものを指すという。

* 討議要旨

ロバート・キャンベル氏は、(『興甫伝』を含む) パンソリが文字化されたのはいつ頃か、パンソリという芸能と毎年出版されていく『膝栗毛』とでは、メディアの違いによる笑いの違いがあるのではないかと尋ね、発表者は、パンソリは18世紀初めに発生し、『興甫伝』も18世紀半ばから愛唱され、文字化されたのは1860年代である、メディアの違いについては私も考えたが、全体のストーリーの比較ではなく、個々の修辞法の比較なので、意味があるだろうと考えた、と答えた。

武井協三氏は、「ノル甫」という主人公の名前の意味は何か、実は佐渡に伝わる「のろまん形」の造形に韓国からの影響があると言われているが、名前も影響されているかもしれないと思ったので、と尋ね、発表者は「興甫」の「興」は出世、「ノル甫」の「ノル」は遊ぶ、という意味で、「ノル」は固有の言葉で漢字が宛てられない、と答えた。